イテリメン語の動詞の自他

小野　智香子

1．イテリメン語の動詞について

本稿では、イテリメン語[1]の自動詞と他動詞の形態的特徴と意味、統語の関係について分析する。以下の記述は、筆者がフィールドで調査した南部方言の資料に基づいている。調査には、故V.D. ザポローツカヤ氏（1933年生まれ、ソポチノエ村出身）、G.A. ザポローツカヤ氏（1935年生まれ、マロシェチノエ村出身）に協力していただいた[2]。また、必要に応じてヴァロージンの資料（Володин 1976）を引用する。

まず、イテリメン語の動詞について、その形態的特徴と統語的特徴を以下に簡単に述べる。

1.1．形態的特徴

イテリメン語は主に膠着的な方法で語形成を行い、品詞は名詞、形容詞、動詞、副詞、助詞がある。動詞には人称・数・法・時制・アスペクトのカテゴリーがあり、それぞれ接辞を付加することによって活用する。人称・数の接辞には、主語を表すものと目的語を表すもの、主語と目的語の両方を表すものがある。イテリメン語の動詞は、主語活用をするか主語・目的語活用をするかによって、自動詞か他動詞かを形態的に明確に区別することができる。また不定詞の場合にも、自動詞は -ke-s/-ka-s、他動詞は -ϕ-(e)s という接尾辞をとり、動詞の自他が形態的に区別される。

1.2．統語的特徴

イテリメン語の文における主要な成分は主語、述語、目的語であるが、述語だけでも文は成立する。主語と目的語はともに名詞の絶対格で表示される。語順は比較的自由であるが、述語は文の最後に、主語は目的語に先行することが多い。動詞が述語である場合、絶対格名詞を１つしかとることのできない動詞が自動詞、絶対格名詞を２つとることのできる動詞が他動詞である。

---

[1] イテリメン語はカムチャツカ半島北西部に居住する先住民イテリメン族の言語で、チュクチ・カムチャツカ語族に属ずるとみなされている。ロシアの統計資料によると、イテリメン族の人口は約1300人、そのうちイテリメン語の話者は9.1%（約120人）である（*Распределение населения России по владению языками.* Москва, 1995）。

[2] 調査場所、日時は次の通りである。
故 Валентина Дмитрьевна Запороцкая 氏：ロシア連邦カムチャツカ州コリヤーク自治管区チギリ地区コヴラン村、1999年8月30日～9月14日（調査時66歳）
Галина Афанасьевна Запороцкая 氏：ロシア連邦カムチャツカ州コリヤーク自治管区パラナ村、2000年3月28日～4月5日（調査時64歳）

2. 自動詞語幹・他動詞語幹の形態の比較

イテリメン語では形態的・統語的に動詞の自他の区別ができることを上で述べた。ただし、上で形態的に区別できるというのは、動詞語幹の外（人称接辞）の話である。イテリメン語の動詞語幹を観察すると、自動詞と他動詞ではそれぞれに特徴的な形態がみられる。以下では自動詞と他動詞が同一の語幹を持つもの、他動詞から自動詞の派生、自動詞から他動詞の派生について、その形態を詳しく観察してみよう。

2.1. 同語幹動詞（Vi ＝ Vt）

自動詞 Vi の語幹と他動詞 Vt の語幹が同じ形態の動詞がある。以下にそのような動詞を挙げる。

動詞語幹	自動詞	他動詞
aŋja	自慢する	～をほめる、賞賛する
aβela	手を振る	～に手を振る
ajtat	追う	～を追う、追い出す
atɬemk'a	（履き物に）つぎを当てる	～（履き物）につぎを当てる
axt	魚をさばく	～をさばく
axɬ [3]	収穫する	～を収穫する
βil	飲む	～を飲む
kuke	煮る	～を煮る
k'eneze	考える、思う	～を考える、思う
ɬot	撃つ	～を撃つ、射殺する
nezβa	狙う、狙いを付ける	～を狙う、～に狙いを付ける
uzil	（自分の体を）打つ	～を打つ
satu	掘る	～を掘る
t'ɬazo	自分を洗う	～を洗う
cχmal	悪態をつく、言い争う、罵りあう	～を罵る、叱る
əɬcku	見る	～を見る
əmtxla	自分の髪をとかす、髪を結ってもらう	～の（髪を）櫛けずる、髪を結ってやる
ejp	くるまる	～を覆う、くるむ

[3] ヴァロージンは in-axɬ という形態を報告している（Володин 1976：204）。

ilɸs	聞く	～を聞く
ec'elil	着物を脱ぐ	～の着物を脱がせる

その他、ヴァロージンは以下のような例を報告している（Володин 1976：200）。

動詞語幹	自動詞	他動詞
lfte	愛する	～を愛する
mec	なくなる	～をなくす
c'ere	盗む	～を盗む

このグループの動詞は、特に自動詞語幹に注目してみると、語幹によって表される動作・行為の対象が認識でき、意味的に他動性が高い。例えば、βil「(自) 飲む、(他) ～を飲む」、kuke「(自) 煮る、(他) ～を煮る」、łot「(自) 撃つ、(他) ～を撃つ」、əłcku「(自) 見る、(他) ～を見る」、ilfs「(自) 聞く、(他) ～を聞く」など。また自動詞の方が、動作・行為が自分自身に向けられる、いわゆる再帰動詞になっているものも比較的多く見られる。例えば、aŋja「(自) 自慢する、(他) ～をほめる」、uzil「(自) (自分の体を) 打つ、(他) ～を打つ」、t'łazo「(自) 自分を洗う、(他) ～を洗う」、ec'elil「(自) 着物を脱ぐ、(他) ～の着物を脱がす」など。

2.2. 他動詞語幹 Vt ＋ -ʔł → 自動詞語幹 Vi

他動詞語幹 Vt に接尾辞 -ʔł を付加することにより、自動詞語幹 Vi が派生される。このような自動詞と他動詞の対には以下のようなものがある。

自動詞語幹		他動詞語幹	
aluptk'a-ʔł	ささやきあう、ひそひそ話し合う	aluptk'a	～にささやく、ひそひそ声で話す
alusk'βa-ʔł	盗み聞きする	alusk'βa	～の話を盗み聞きする
βaŋe-ʔł	刺繍をする	βaŋe	～に刺繍する
keli-ʔł	書く	keli	～を書く
k'ule-ʔł	引っかく	k'ule	～を引っかく
ləmə-ʔł	自分を洗う	ləmə	～を洗う
leʔlɸłe-ʔł	噛む	leʔlɸłe	～を噛む
l'eci-ʔł	治療を受ける	l'eci	～を治療する
niŋi-ʔł	荷降ろしをする	niŋi	(荷物を) ～に積む
nisk'i-ʔł	嗅ぐ	nisk'i	～を嗅ぐ
oβa-ʔł	キスする、キスしあう	oβa	～にキスする
ciʔnŋi-ʔł	縫い物をする	ciʔnŋ	～を縫う

ipstu–ʔɬ	水をふりかける	ipstu	～に水をふりかける

このグループの動詞も自他同語幹動詞と同様、自動詞語幹によって表される動作・行為の他動性が高い。例えば、βaŋe–ʔɬ「(自) 刺繍をする」－βaŋe「(他) ～に刺繍する」、keli–ʔɬ「(自) 書く」－keli「(他) ～を書く」、ipstu–ʔɬ「(自) 水をふりかける」－ipstu「(他) ～に水をふりかける」など。また、自動詞が再帰動詞である例 (ləmə–ʔɬ「(自) 自分を洗う」－ləmə「(他) ～を洗う」や、動作・行為が相互に及ぶ例 (aluptk'a–ʔɬ「(自) ささやきあう」－aluptk'a「(他) ささやく」、oβa–ʔɬ「(自) キスする、キスしあう」－oβa「(他) ～にキスする」) もある。

2.3. en–/an– ＋ 他動詞語幹 Vt (＋–ʔɬ) → 自動詞語幹 Vi

他動詞語幹 Vt に接頭辞 in–/an– を付加することにより自動詞語幹 Vi が派生される (その際、接尾辞–ʔɬ が同時に現れる場合もある)。そのような自動詞と他動詞の対には以下のようなものがある。

自動詞語幹		他動詞語幹	
am–pəl	噛む、かじる	pəl	～を噛む
an–əncxca–ʔɬ	勝利する	əncxca	～に勝つ
an–ɬne–ʔɬ	読む	ɬne	～を読む
in–ənk'zu–ʔɬ	助ける	ənk'zu	～を助ける

その他、ヴァロージンは次のような例を報告している (Володин 1976 : 203-204)。

自動詞語幹		他動詞語幹	
an–ancpa	教育する	ancpe	～に教える
an–ɬxa–ʔɬ	拭く	ɬxa	～を拭く
in–inju	番をする	inju	～の番をする
in–tkite–ʔɬ	投げる	tkite	～を投げる

このグループの動詞も上記のグループと同様に、自動詞語幹が意味的に他動性を有している。am–pəl「(自) 噛む」－pəl「(他) ～を噛む」、an–ɬne–ʔɬ「(自) 読む」－ɬne「(他) ～を読む」など。

2.4. ən– ＋ 自動詞語幹 Vi (＋ –(ʔ)ɬ/–ŋ/–β) → 他動詞語幹 Vt

自動詞語幹 Vi に接頭辞 ən– を付加することにより、他動詞語幹 Vt が派生される。このよ

うな自動詞と他動詞の対には、以下のようなものがある。

自動詞語幹		他動詞語幹	
aβaze	甘える	ən–aβaze	～をかわいがる
aβa	（川が）あふれる	ən–aβa	～を氾濫させる、あふれさせる
ameɬat	消える、隠れる	(ə)n–ameɬat	～を隠す
ap'əŋ	息苦しくなる	ən–ap'əŋ	～を窒息させる、絞め殺す
βetβet	真っ直ぐになる	ən–βetβet	～を真っ直ぐにする
ɬma	別れる	ən–ɬma	～を分ける、引き離す
krβeɬxet	話す、会話する	ən–krβeɬxet	～を説得する
ksxli	現れる、姿を見せる	ən–ksxli	～を見せる
k'ol	壊れる	ən–k'ol	～を壊す
k'ili	回る	ən–k'ili	～を回す
qsi	自由になろうとする、振り切って逃げる	ən–qsi	～を解放する、放す
qaʔm	侮辱を感じる、腹を立てる	ən–qaʔm	～を侮辱する、怒らせる
qejβe	沸く、沸騰する	ən–qejβe	～を沸かす
quma	着る、履く	ən–quma	～に着物を着せる、～に靴を履かす
tilxɬ	驚く、びっくりする	ən–tilxɬ	～を驚かす、びっくりさせる
reβat	喜ぶ、うれしがる	ən–reβat	～を喜ばせる
ceɸi	急ぐ	ən–ceɸi	～を急がせる、せかす
esxɬi	目が覚める	ən–sxɬi	～を目覚めさせる、～を起こす
sxozŋa	向く	ən–sxozŋa	～を向ける
kɬa	沈む	ən–kɬa	～を沈める
txaʔne	濡れる	ən–txaʔne	～を濡らす
t'enŋe	ぶら下がっている、吊してある	ən–t'enŋe	～を吊す、ぶら下げる

また、接頭辞 ən– にくわえて、–(ʔ)ɬ, –ŋ, –β といった接尾辞が同時に付加される場合がある。このような自動詞と他動詞の対には以下のようなものがある。

自動詞語幹		他動詞語幹	
co	とける	ən–co–ɬ	～をとかす
ɬa	すわっている	ən–ɬa–ɬ	～をすわらせる
tχzu	立っている	ən–tχzu–ʔɬ	～を立てる
χaqen–ɬ	怒る	ən–χaqe–ŋ	～を怒らせる
qitit	凍る	ən–qitit–eβ	～を凍らせる

このグループの動詞は前述した３つのグループとは異なり、自動詞語幹によって表される動作・行為の対象を認識しにくく、他動性は低い。また、他動詞語幹により表される動作・行為の対象をＯとし、動作主をＡとすると、Ａの動作・行為の制御性（Controllability）が高く、Ｏの制御性が低いことがわかる。もとになる自動詞語幹によって表される動作・行為の主体 S についても、その動作・行為の制御性は比較的低い。k'oɬ「(自) 壊れる」－ən–k'oɬ「(他) ～を壊す」、qejβe「(自) 沸く、沸騰する」－ən–qeiβe「(他) ～を沸かす」、kɬa「(自) 沈む」－ən–kɬa「(他) ～を沈める」、txaʔne「(自) 濡れる」－ən–txaʔne「(他) ～を濡らす」、co「(自) とける」－ən–co–ɬ「(他) ～をとかす」、qitit「(自) 凍る」－ ən–qitit–eβ「(他) ～を凍らせる」など。従って、自動詞では感情や身体的な状態を表す動詞もこのグループに多く見られる。ap'əŋ「(自) 息苦しくなる」－ən–ap'əŋ「(他) ～を窒息させる」、qaʔm「(自) 侮辱を感じる」－ən–qaʔm「(他) ～を侮辱する」、tilxɬ「(自) 驚く」－ ən–tilxɬ「(他) ～を驚かす」、reβat「(自) 喜ぶ」－ ən–reβat「(他)～を喜ばせる」、esxɬ「(自) 目が覚める」－ən–sxɬ「(他) ～を目覚めさせる、起こす」、χaqen–ɬ「(自) 怒る」－ən–χaqe–ŋ「(他) ～を怒らせる」など。

またこのグループの自動詞にも、S の制御性が比較的高めのものが存在するが、この場合でも動作・行為の制御性はＡが高く、O が低い。これについては次の例を参照されたい。

(1a) p'ec qoxeɬ quma–ϕ –βen.
子（絶 sg.）毛皮上着（具 sg.） 着る 過 3sg.
「子は毛皮上着を着た」

(1b) laχsχ p'ec ən–quma–ϕ –nen qoxeɬ.
母（絶 sg.）子（絶 sg.） 着る 過 主３目 3sg. 毛皮上着（具 sg.）
「母は子に毛皮上着を着せた」

(1c) laχsχ p'ec ɬən–quma–ϕ –nen qoxeɬ.
母（絶 sg.）子（絶 sg.） 使役 着る 過 3sg. 毛皮上着（具 sg.）
「母は子に毛皮上着を着させた」

(1a) は自動詞 quma「着る」、(1b) は接頭辞 ən– により派生された他動詞「～に着せる」の例、また (1c) は自動詞 quma「着る」に使役の接頭辞 ɬən– を付加した使役動詞の例である。(1b) では子に毛皮上着を着せる行為をしているのは母であるが、(1c) では毛皮上着を着る行為を行っているのは子自身である。従って、(1b) は (1c) と比較すると、A の制御性が高くＯの制御性が低いことが明らかである。

2.5. t- ＋ 自動詞語幹 Vi → 他動詞語幹 Vt

自動詞語幹 Vi に接頭辞 t- を付加することにより、他動詞語幹 Vt が形成される。このような自動詞と他動詞の対には以下のようなものがある。

自動詞語幹		他動詞語幹	
nas	下りる	t-nas	～を下ろす
efs	上がる	t-efs	～を上げる
le	なる	t'-i-le	～にする

その他、ヴァロージンは t-fi「～に水路を与える」 ＞ fi「航行する、泳ぐ」を挙げている（Володин 1976 : 203）。このような接頭辞 t- による他動詞の派生は生産的ではなく、ごく限られた動詞にのみ観察される。

また、上述の他動詞化の接頭辞 ən- と t- を組み合わせて自動詞から他動詞を派生する例（ən-t'-unme-ɬ「～を止める」＞ unme「止まる」）もまれに見られる。

このように、接頭辞 t- による自動詞から他動詞の派生は非常に限られた語にしか見られないが、こうして派生された他動詞語幹は、動作主 A の制御性が高く動作・行為の対象 O の制御性が低いという点で、接頭辞 ən- と機能的には一致している。

3. まとめ

上で、イテリメン語の自動詞語幹 Vi と他動詞語幹 Vt を、形態的に次のようなグループに分類して見てきた。

A. Vi ＝ Vt
B. Vt ＋ -ʔɬ → Vi
C. en-/an- ＋ Vt （＋-ʔɬ） → Vi
D. ən- ＋ Vi （＋ -(ʔ)ɬ/-ŋ/-β） → Vt
E. t- ＋ Vi → Vt

このうち、A, B, C のグループでは、自動詞語幹によって表される動作・行為の対象が認識でき、意味的に他動性が高いことを見た。また、自動詞が再帰動詞になっているものや動作・行為が相互に及ぶものも見られた。つまり、A, B, C のグループでは他動詞を自動詞化する際、統語上では他動詞の目的語を削除して、動詞語幹によって表される動作・行為そのものに重点を置くという方法をとっている（A グループの自動詞も他動詞の自動詞化とみなす）。その結果、自動詞では動作・行為の再帰性、相互性を表す場合もあるのではないかと考えられる。

一方、D,Eのグループの動詞は上述のA,B,Cグループとは大きく異なる。まず自動詞については、語幹によって表される動作・行為の対象を認識しにくく、他動性が低いこと、動作・行為の主体 Sの制御性が比較的低いことを見た。そして対応する他動詞では、動作主Aの動作・行為の制御性が高く、動作・行為の対象Oの制御性が低いことが観察された。D,Eのグループでは自動詞を他動詞化する際、統語上では自動詞主語を他動詞目的語化し、意味的には（もともと制御性の低い）動作・行為の主体Sを対象Oとし、動作主Aの制御性を高める。

しかし、例えば日本語の「割る」＞「割れる」、「焼く」＞「焼ける」、「切る」＞「切れる」などのように、他動詞目的語を自動詞主語化するような動詞語幹の形態的派生はみられない。このような場合は、イテリメン語では受動構文をとり、統語的な方法によって他動詞目的語を自動詞主語化する。

以上、イテリメン語の動詞の自他について、その形態的特徴と意味、統語との関係を考察した。イテリメン語の動詞語幹の形態的派生には他動詞の自動詞化と自動詞の他動詞化があるが、他動詞の自動詞化では目的語を削除し、自動詞の他動詞化では自動詞主語を目的語化するという、2つのパターンがあることを示した。他動詞の自動詞化において、他動詞目的語を自動詞主語化するような動詞語幹の形態的派生法がないことが、イテリメン語で受身文が多用されることと深く関わっていると考えられるが、このような統語的な構造も含めたヴォイス全般の問題については別の機会に考察したい。

参考文献：

Comrie, Bernard, *Language Universals and Linguistic Typology.* Chicago, 1981.

Володин А. П., *Ительменский язык.* Ленинград, 1976.

Володин А.П. и Халоймова К. Н., *Ительменско-русский и русско-ительменский словарь.* Ленинград, 1989.

Распределение населения России по владению яазыками (по данным микропереписи населения 1994 г., Госкомстат России. Москва, 1995.